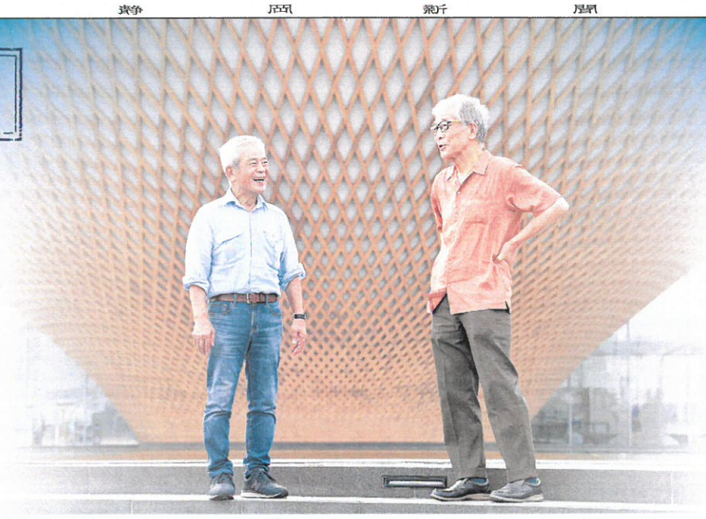
8・10「山の日」
静岡・山梨県立美術館長対談「仰ぎ見る富士山」

霊峰の秀麗 芸術導く

火の山 畏怖「神格化」

静岡新聞社、山梨日日新聞社が企画した木下直之静岡県立美術館長(66)、青柳正規山梨県立美術館長(75)の対談は、「信仰の対象と芸術の源泉」としての富士山の価値を改めて検証する場となった。両美術館とも、学芸員らによる活発な富士山の調査研究、教育活動が展開されているだけに、両氏の発言は霊峰に宿る普遍的な文化的価値や、その価値を次世代につなぐ両県民の責務まで、多面にわたった。
（司会・静岡新聞社文化生活部横爪充、山梨日日新聞社文化・くらし報道部清水健、写真・静岡新聞社写真部二神亨）



対談を前に、会場の佛coo富士山世界遺産センターの外観のシンボルになっている木造十五重塔の模型に登る静岡県立美術館の木下直之館長（右）と山梨県立博物館の青柳正規館長＝富士吉田市

山梨県立美術館長
青柳 正規さん

あおやぎ・まさのり　1944年旧満州生まれ。ギリシャ・ローマ考古学者。東京大教授、国立西洋美術館長、文化庁長官などを歴任。2017年から山梨県立美術館長。

静岡県立美術館長
木下 直之さん

きのした・なおゆき　1954年浜松市生まれ。兵庫県立近代美術館学芸員、東京大大学院教授（文化資源学）などを歴任。2017年から静岡県立美術館長。本紙「時評」執筆中。

「文化」は社会の活力 付き合い方知る必要

価値継承のために

司会　新型コロナウイルス禍が続く中、霊峰は人が生活生業の中で祈りをささげる存在でもあります。改めて、世界遺産富士山の価値についての考えと、価値を継承するために両県民はどんな構えや行動が求められるかをお願いします。

青柳　大きな社会活動の中で経済の存在感が大きくなりすぎ、世界全体が数で計算できるものしか社会活動としてみなさないようになっています。どんな状況を救済化する、定量的な社会になっている。でも本来は、定性的で貴重が問われる「文化」が活発でないと社会の活力は出てこない。定量化だけではどうしようもない社会になること、コロナ禍で浮き彫りになっている。だからこそ信仰や芸術の源泉としての富士山を考えることは非常に大事ではないかと思います。

木下　富士山は噴火し、形を変えながら存在し続けてきました。われわれはその周りをさまざまいているだけの存在だといえます。でも、富士山と向き合いながら、いろいろなものをつくり出してきた。その一端が芸術として残っているわけです。この山を人々がどう見てきたか、富士山をどういう付き合い方をしてきたかを、現代のわれわれはよく知る必要があります。これまでの検証が、この山との今後の付き合い方を教えてくれるのです。

青柳　世界遺産登録によ り、富士山はナショナリズム一辺倒では捉えられない存在になりました。山梨と静岡は、人類が価値ありと認めたものを県境に持っている。国際的に価値がある富士山を宿す大切にする一方、それ以外の国や地域にあるものもしっかり認めていきたい。

司会　そうしたマインドを育てるきっかけにしようということでしょうか。

青柳　そうです。人類が地球上で活動を続けるための唯一の可能性は、どう多様性を維持するか。富士山後の付きあいを教えるのは、世界の文化の多様性を旨とすることにつながります。

「シンボル」の変遷

司会　富士山は2013年に「信仰の対象、芸術の源泉」として世界の宝になりました。芸術作品における富士山の描かれ方についてうかがいますか。

青柳　あこがれの対象として、長く文学や絵画という形で描かれてきているのが強みでしょう。長年の注目と称賛が存在を大きくしています。5～6年前、雪舟の岡田美術館・横山大観の「霊峰一文字」を見て、迫力に圧倒されました。富士山はこれだけのものを画家に描かせる力を持っているんだなとうつくづく思いました。

木下　富士山は火山であることで神格化されています。まず噴火を鎮めることが必要だったので神を祭った。それが浅間神社になり、長い時間をかけて信仰の対象になりました。それを踏まえて、いろいろな場所から富士山を見る芸術表現が出てきます。注意したいのはもう一つ、富士山は別の場所とつなげられること。三保松原や駿河湾遠景の宿になった清見寺が一例です。江戸時代には朝鮮通信使の加藤清正が富士山を見ている3世紀もある。富士山が日本を代表する山になったのは、かなり早い時期ではないでしょうか。

司会　政府の「世界遺産一覧表への記載推薦書」（12年）によると、政治の中心地が京都から鎌倉に移行した12世紀に街道の往来が増加することで富士山の情報が広く知られるようになったとあります。

木下　人の往来が増え、東海道から見た富士山のイメージが広まったのでしょう。東海道から、あるいは海路からの見え方。富士山信仰が庶民に広まった江戸時代半ばになると、北からの視点も加わります。

青柳　平安時代はほとんどが京都で完結するような狭い世界で日本が動いていました。ところが源頼朝や奥州藤原家が出てきて、急に鎌倉や平泉が世界に入り、一気に日本の空間が広がってくる。そうした動きの中で富士山はナショナルなものになったのではないでしょうか。

木下　鎌倉幕府成立で鎌倉を小さな京都にしようとしたことは明らかです。大きさは縮分が違うが日本国内に中心が二つできた。それを受けて、途中にある駿河で発展な山が特別な意味を持つようになったのです。

司会　江戸時代以降の捉え方はいかがでしょうか。

青柳　秀吉の朝鮮出兵でがたがたになった東アジアの国際関係を修復しようと苦労したのが徳川家康。そんな時代背景だからこそ、日本のシンボルが必要で、それが富士山だった。

木下　印刷物が身近にある社会が出現し、富士山のイメージ商品化され、手に持てるようになった。近代になると、ナショナリズムの意味合いが強まります。両県が分かれている国を束ねる、国家を意識させる強いモチーフだったのです。

注目と称賛「描かせる力」に ■ 国を束ねる強いモチーフ

なぜ一つの山執着 北斎や広重に興味

西洋画家への影響

司会　19世紀、歌川広重、葛飾北斎らの浮世絵は富士山をアイコンとして世界に広め、西洋の画家にも影響を与えました。欧米の人たちが価値を認め、崇拝には何があるでしょうか。

青柳　どうして日本人は一つの山に執着しているのか、ということではないでしょうか。富士山のような孤立峰で美しい山は唯一無二ではありません。似たような山がアフリカにも北米にもあることを西洋人は知っていたはずです。

木下　セザンヌもサント・ビクトワール山を繰り返し描いていますが、ありとあらゆる画家がこれでもかとこの山を描くというのはあまりないですね。

司会　こうした浮世絵は、19世紀後半のジャポニスムといわれる芸術潮流の中で、どんな役割を果たしたのでしょうか。

青柳　ジャポニスムは、二つはありません。似たような山がアフリカにも北米にもあることを西洋人は知っていたはずです。

木下　日本人が浮世絵の価値を認識したのは、明治時代半ばぐらいだったから、一時期はやはりずいぶん（作品が国外に）流出した。当時の欧米にあるというタイプの絵は少なかったようです。人生のありとあらゆるものを全部絵画化していく。人間をここまで表現できるのかという驚きがあったと思います。見渡した時に「面白そうなものがある」と吸引したのだと思います。その中で非常に分かりやすく、人間的な思います。その中で非常で、世俗的なものの一つが北斎だった。遠近感覚とは一つ広重の構築性のある構図が浮かれました。

青柳　富士山を描いた版画家萩原英雄の作品がなかなか。北斎は全然人間を描いていない。富士山をいろいろな自然のシチュエーションで表現しています。今後は、富士山の写真をもっと集めたい。甲府市からは富士山、南アルプス、八ケ岳という三者三様の山容が見えます。山容を写真だけというつにになると思います。

青柳　富士山を描いた版画の中には、版画家萩原英雄の作品がなかなか。北斎は全然人間を描いていない。富士山をいろいろな自然のシチュエーションで表現しています。今後は、富士山の写真をもっと集めたい。甲府市からは富士山、南アルプス、八ケ岳という三者三様の山容が見えます。山容を写真だけというつにになると思います。

収蔵品の意義 特徴

「風景美術館」の柱

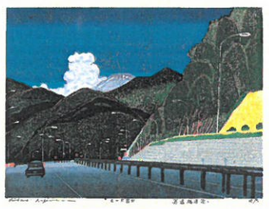
司会　美術館収蔵の富士山作品の意義や特徴は。

木下　開館から14年が経過しましたが当初から「風景の美術館」をうたい、富士山を柱の一つと位置づけていました。公立美術館は現代で、国の名所が多いのですが、当館は近代以前の社会を視野に入れるのが重要と考え、一つのモチーフとして富士山を集めてきました。作品を通じて当時の人々の考え方に理解を深めることは、大きな意義を持つことになると思います。

青柳　富士山を描いた版画の中には、版画家萩原英雄の作品がなかなか。北斎は全然人間を描いていない。富士山をいろいろな自然のシチュエーションで表現しています。今後は、富士山の写真をもっと集めたい。甲府市からは富士山、南アルプス、八ケ岳という三者三様の山容が見えます。山容を写真だけというつにになると思います。

絵画に見る富士山

萩原英雄「連作<三十六富士>高速終点近し」（1981～86年、木版、山梨県立美術館蔵）

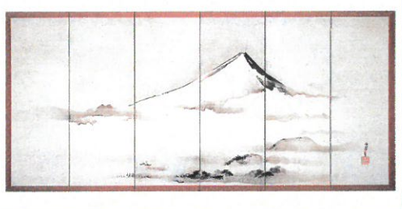


車窓から捉えた富士山。真夏の空が広がり、山々の向こうに白い雲が立ち上る。高速道路の出口が迫り、風景がどんどん流れていく中、雲の隣にのぞく薄紫色の頂を描いた。

萩原英雄（1913～2007年）は甲府市出身。日本を代表する木版画家として世界的な評価を得ている。幼少期を朝鮮半島で過ごし、学生時代からずっと東京で暮らした萩原にとって、故郷といえば富士山のことだった。そこには両親への思慕も重なる。

本作はライフワークとした「三十六富士」のうちの1点。葛飾北斎の「冨嶽三十六景」に挑み、25年かけて自身の富士山36点を完成させた。

谷文晁「富士図屏風」（1835年、六曲一隻　紙本墨画群青引、静岡県立美術館蔵）



関東画壇の重鎮谷文晁（1763～1840年）の晩年の大作。文晁73歳の円熟の境地が示されている。

背の高い画面の中心に富士山を据え、前景に木々や池船を配した。周辺の雲は、墨のグラデーションで変化に富んだ動きを表現。画面全体に胡粉が塗られているため富士山の白さが際立つ。

稜線は左右で描き方が異なる。左側は細く軽快な筆遣いだが、右側は力強い筆致で山肌の質感や量感を強調している。右側の墨線には群青が引かれ、見る角度によって浮かび上がるように発色する。眺める場所によって姿が変化する富士山の在りようそのものとの見方もある。

世界の宝を守り、継ぐ

川勝平太
静岡県知事

富士山は、日本のシンボルであり、世界の宝です。

例年であれば、国内外から多くの登山者や観光客の皆様をお迎えしているところですが、今年は新型コロナウイルス感染症予防のため、開山を見送りました。その代わりにこの夏は、山麓の神社や白糸の滝など数々の構成資産を巡り、そこから「仰ぎ見る富士山」を楽しんでいただきたいと思います。

また、「バイ・ふじのくに」の取り組みとして、静岡・山梨両県にお住まいの皆様を対象に、県有文化施設の観覧料を割引しています。この機会に富士山に関する作品を鑑賞することで「信仰の対象、芸術の源泉」としての富士山の魅力を共に感じていただき、交流が深まることを期待しています。

これからも、富士山の顕著な普遍的価値の理解を深め、富士山を守り、後世に引き継いでまいりましょう。

長崎幸太郎
山梨県知事

本県では、8月に「やまなし『山の日』」を設け、山梨の山の魅力や恩恵を広く発信しています。

今夏は、富士山に登ることはできませんが、この時期に、山梨県立美術館では、横山大観が描いた富士山の四季折々の姿をお楽しみいただけます。

県立文学館、博物館、考古博物館でも、富士山にまつわるさまざまな展示を行い、日本一の山の魅力を独自の切り口で紹介しています。

現在、本県と静岡県は、31日まで「バイ・ふじのくに」の取り組みとして、これらの文化施設の観覧料割引キャンペーンを実施しています。

本県の感染拡大防止対策にご協力をいただく中で、山梨・静岡両県民の皆様が、文化や芸術の視点から富士山を仰ぎ見ていただくことにより、文化観光という新たな人的交流につながることを期待しています。

「文化観光」交流に期待